

# 評価定まらぬムバラク元大統領の功罪

福岡女子大学准教授  
鈴木恵美

三〇年間エジプトに君臨したムバラク元大統領。シナイ半島を奪還し経済建設を果たしたが、エジプト革命の顛末が、評価に影を落としている。

二月二五日、ムバラク元大統領がカイロ郊外のナイル川を見渡す国軍病院で、九一歳で亡くなった。かねてより内臓疾患があり、緊急手術を受けた後の死だった。葬儀は国葬ではなく、国軍葬として執り行われた。しかし、葬儀には大統領をはじめ、首相以下新旧の政治家、各国大使、宗教指導者らが参列した。大統領府は三日間の喪を発表し、学校は一斉休校となり、メディアも画面に喪章を表示した。実態は国葬といえよう。

ムバラクは、一九二八年に軍人を多く輩出することで知られるメノフィーヤ県の中流家庭に生まれた。高校卒業とともに士官学校に入学し、空軍学校の教官、ソ連留学などを経て、七三年の第四次中東戦争では空軍司令官としてエ

ジプト軍の躍進に貢献した。初めて政治に関わるようになったのは、サダトが陸軍を牽制するため、空軍出身のムバラクを副大統領に指名したことによる。八一年にサダトが軍事パレード中に青年将校らに暗殺されたのにもない大統領に昇格し、二〇一一年の政変（一月二五日革命）で大統領の座を追われるまで、約三〇年間権力の座にとどまった。

ムバラクは、生き残りに長けた人物であった。少なくとも六回の暗殺未遂を生き延びた。一年の政変後は、デモ隊殺害命令の容疑で裁判に臨むことになり、ベッドに横たわりながら檻のような防御柵の中で裁判を受ける姿は人々に衝撃を与えた。しかし、元国軍総司令官のスイースイー

が大統領に就任すると風向きが変わり、最終的に無罪放免となった。

## エジプト革命とは何だったのか

二〇一一年からの政治動乱を知るものは、ムバラクの死の報に触れ、「革命」とは一体何であったのか、改めて自問したことだろう。多くのエジプト人にとって、ムバラクの功績は軍人時代のものである。第三次中東戦争で壊滅状態となった空軍を立て直し、第四次中東戦争で軍事的に躍進したことが、その後の政治交渉でのシナイ半島奪還につながった。大統領としては、サダトが築いた、いわゆるキャンプ・デービッド体制を継承し、親米路線を取り続けた。また戦争がなくなつたことで、エジプト人は経済開発に専念することができた。しかし、イスラエルと「冷たい平和」の関係を維持した政治家としての評価は決して高くない。反イスラエル感情の強いエジプトでは、回国への妥協、アメリカ追従と見えるのであろう。

罪の側面は、ナセル以来の警察国家を引き継ぎ、国民の政治的自由を制限したこと、そして一九九〇年代以降はIMFの構造調整政策の実施過程で、社会全体に汚職を蔓延させたことである。イスラーム主義者に対しては、厳しく

管理あるいは弾圧したことで、一部を地下に潜り急進化させた。また、ナセル時代からの軍産複合体の拡大を許し、軍の経済活動と国家経済が不可分な状態を解消する策を講じなかった。そもそもムバラクにはその意思はなかったのだろう。直接的には国軍の権益に手を出さなかった。そして、二〇一一年の政変時に八〇〇名を超す犠牲者を出したことも、人々の脳裏に生々しく記憶されている。

ムバラクは、農民らしさを売りにしたサダトとは違い、土臭さを感じさせない大統領であった。しかし、一年の政変では、辞任を迫る国民に対する演説では語気を強め、自分は戦争で国土を守つたのであり、エジプトは私が死ぬ土地であると主張し、最後まで辞任や亡命を拒否した。これは、単に大統領の座にとどまるための方便ではなく、本人の偽らざる思いであつただろう。そして、自分に対する評価は歴史が決めると、確固たる自信を見せた。

はたして、今後人々の中には、どちらのムバラク像が残るのだろうか。現在、スイススイ政権は国軍を中心とした国家体制を強化し、治安の安定を理由にムバラク期以上に言論の言論や国民の政治的権利を制限している。この分だと、ムバラク時代を懐旧の念で振り返る人が増えそうである。●